令和4年度マッチングファンド一般助成助成事業

『移動型プレイパークでのびのび遊べるまちをつくろう』
報告書

特定非営利活動法人たねの会

目次

子どもの頃どんな遊びが
楽しかったですか？

キラキラ・ワクワクした瞬間を
覚えていますか？

夢中になったり　けんかしたり
失敗したり「やったぁ！」があったり

そんなかけがえのない瞬間は
きっと一生の宝物。

今子どもたちには
本気で遊んで泣いて笑える
そんな場所が必要です。

やってみたい気持ちは生きる源。

子どもたちがのびのびと
遊び育つ社会のために
私たち大人にできること
一緒に考えてみませんか？

はじめに　01

「プレイパーク」とは　02

「たねの会」の紹介　03

本事業の全体　05

１．「移動型プレイパーク」の開催　06

２．「講演会」の開催　12

３．「学習会」の開催　14

４．「検討会」の開催　15

５．まとめと考察　19

おわりに　21

はじめに

私たちは現在、さいたま市子ども家庭総合センター「あいぱれっと」において「冒険はらっぱ」という常設型のプレイパークをさいたま市より委託を受け運営しています。

そこでは普段子どもたちが体験することのできなくなった遊び（穴掘りや木登り、木工や水遊びなど）や「やってみたい！」と思う遊びを、子どもたち自身が考えてできる環境をつくっています。そしてここには、市内各地からたくさんの方が遊びにきています。

しかし、子どもたちにとって遊びは日常的なものであり、もっとそれぞれの身近な場所に、発見や挑戦ができる環境をつくっていく必要があるのではないか。そう考え、チャレンジさせていただいたのが本事業です。

メインの活動は、遊び場づくりの専門職であるプレイワーカーが様々な遊び道具をもって地域を訪れ、その地域の方々と一緒に遊び場をつくっていく「移動型プレイパーク」です。

また、様々な立場の方と子どもの環境、地域のつながり、他市の事例など学べる場をもうけ、子どもたちが健やかに育っていく環境づくりについて一緒に考えていただけるよう、事業を実施しました。

この冊子はその報告です。本事業について知っていただくとともに、ぜひ感想やご意見などお寄せいただけたら幸いです。

＊「プレイパーク」と「プレーパーク」、「プレイカー」と「プレーカー」は同義です。団体によって使用する表記が異なっており、本報告書ではそれぞれの表記を尊重しています。ご了承ください。

「プレイパーク」とは

プレイパーク（冒険遊び場）とは、1943年にデンマークで生まれました。大人が用意した遊びのプログラムや既成の遊具ではなく、子ども自身の「やってみたい」気持ちを大切に、子どもの手でつくりかえることのできる遊び場です。日本では1970年代に始まり、全国で450団体以上に広がっています。地域住民が主体となり、行政と協働で開かれている場所も多く、「プレイリーダー」「プレイワーカー」というスタッフを置くところもあります。

日本冒険遊び場づくり協会の定義では「冒険遊び場は、すべての子どもが自由に遊ぶことを保障する場所であり、子どもは遊ぶことで自ら育つという認識のもと、子どもと地域と共につくり続けていく、屋外の遊び場である」とされています。

見守りのある中でありのままの自分を出せる場所。遊びながら自然と育ちあえる場所。

移動型プレイパークの動き

「移動型プレイパーク」は近年、日本で増えてきた形態のプレイパークです。１つの場所でだけでなく、様々な場所に出張して遊び場を開く活動が増えています。2008年から千代田区や神田、世田谷でプレーカー（遊び道具や素材を積んだ車）を使った活動が開始され、2011年の東日本大震災の際には、子どもの心のケアとしてプレーカーによる遊び場づくりも注目されました。

日本冒険遊び場づくり協会では2021年『はじめよう！プレーカーで広がる遊び場づくり』を発行。翌年にはプレイカーに詰め込む遊びの道具や素材＝プレーキットを紹介するサイトがオープンされています。また、『移動式あそび場全国ネットワーク』も2021年に発足し、現在、移動型の遊び場づくりが全国に広がっています。

「たねの会」の紹介

まちに遊びのたねをまこう！

社会環境の大きな変化によって、子どもたちからは自由に遊べる空間や時間、仲間が急激に失われています。管理や禁止も増え、大人にとっても子育てを楽しめる「あそび（ゆとり）」や仲間が減っているのが現状ではないでしょうか。

たねの会はそのような社会背景をふまえ「冒険遊び場づくり」を１つの手段として、子どもたちがのびのびと遊び育つことのできる場づくり、関係づくりを実践してきました。

大人も子どもも入り混じって遊び、それぞれの「やってみたい」や「面白い」を認めあい、応援しあう。子どもも大人もありのままの自分と出会い、ワイワイと過ごすことでみんなにとっての居場所がつくられています。

やってみたいからはじまる遊びは、人が生きることそのもの。 たねの会が目指すのは、子どもが過ごすすべての場所、学校や保育園・幼稚園、地域の施設、家庭、まちの中で「遊ぶこと」の価値が大切にされる社会の実現です。

そのために、さまざまな事業を通して気づきや共感の輪を広げ、多様な人々が尊重しあいながら生きていくことのできる、遊びあふれる豊かなまちづくりのたねをまく活動を続けています。

＜たねの会のあゆみ＞

2003年　発起人2人が出会い、
　　任意団体「さいたま冒険遊び・たねの会」発足
2006年 「さいたま冒険遊び場・たねの会」に改名
2007年 「別所沼プレーパーク」定期開催スタート
　　（自主開催）
2010年 「別所沼プレーパーク」がさいたま市の
　　委託事業となる。
　　（2016年より「あそびの森」に運営を委譲）
2016年 「特定非営利活動法人　たねの会」設立
2018年　さいたま市の業務委託を受け
　　「冒険はらっぱプレイパーク」運営開始

たねの会の主な事業

場をひらく

主催運営事業

常設の遊び場「冒険はらっぱプレイパーク」（さいたま市浦和区）を運営しています

遊びを伝える

啓発普及事業

学習会やワークショップを開催し、遊びの大切さや大人の役割について学び合うきっかけづくりをしています

一緒につくる

遊び場づくり支援事業

遊び場づくりをやってみたい！という方たちのお手伝いをします

人をつなぐ

ネットワークづくり事業

「遊び」を大切にするまちづくりのために、行政や他団体と協力関係をつくっていきます

共に育つ

人材育成事業

子どもや遊び場づくりに関わる人材育成のための研修を行っています

illustration/大河原朱里

本事業の全体

プレイパークのない地域の方にプレイパークを体験してもらい、継続に向けてのたねまきを行う

１．移動型プレイパークの開催

さいたま市内で、まだプレイパークの動きのない地域のうち、３つの区の公園を選んで移動型プレイパークを開催しました。限られた回数のため、比較的普段から利用の多い公園を選び、広くプレイパークについて知ってもらうことを目標にしました。また、プレイパークとして様々な遊びを展開しやすい公園を選び、公園管理者と相談しながら開催場所を決めました。開催前には担当課を通して近隣の自治会さんにご挨拶にうかがい、チラシの配布等をお願いすることができました。

開催時にはアンケートを行い、感想やご意見をうかがいました

２．講演会の開催

NPO法人日本冒険遊び場づくり協会代表の関戸博樹さんをお招きし『子どもがのびのび育つまちづくり～地域でできる遊び場づくりの取り組み事例』としてオンライン講演会を開催。当日、アーカイブあわせて67名の参加があり、子どもにとっての遊びの大切さ、そのための地域づくりについて一緒に考えていただくきっかけとしました。

３．学習会（座談会）の開催

移動型プレイパークを開催している地域の方向けに「やってみたい！を実現する遊び場づくりのコツ」と題した学習会を開催。座談会形式で、どのようにしたら自分たちが望む遊び場づくりができるか、プレイワーカーも一緒に考えたりお互いを知り合える時間をつくりました。

４．検討会の開催

今年度の移動型プレイパークについての成果や課題等について報告するとともに、上記関戸さんよりプレイパーク事業についての先進事例をご紹介いただき、今後さいたま市で遊び場づくりを進めていく際の課題や展望について様々な方と検討するための会をもうけました。

５．まとめと考察　（報告書の作成）

今年度の移動型プレイパークについての事業に関するまとめと、それをふまえた今後の課題や提案についての考察をおこない、報告書にまとめました。

１．「移動型プレイパーク」の開催
①平日10～12時　＠番場公園（北区）

01　令和4年6月8日(水)　雨
参加者：乳幼児5名　小学生0名　大人11名　合計　16名

雨天の中のスタート。10時半を過ぎると、2組の親子が来園。同じ1歳ということもあり、親子それぞれすぐに打ち解けていた。11時くらいから次々と遊びにきてくれる。4歳の男の子は水鉄砲に、3歳の女の子はしゃぼん玉に、2歳の男の子は他の子がやっている遊びに興味をもち遊び始める。子どもたちも段々行動範囲が広がり、声を出して元気に遊ぶようになった。雨どいをつかってボールを高いところからコロコロ転がしたり、水たまりを歩いたり、シャボン玉の泡で遊び始めたり。親御さん同士も声をかけあっておしゃべりし、最後には一緒に片付けをしてまた遊ぼうね、と次回の再会を楽しみにしていた。

02　令和4年7月13日(水）　雨
参加者：乳幼児4名　小学生0名　大人3名　合計　7名

本日も雨。２組の１歳児親子が来て、水や泥でのままごとから始まり、シャボン玉、ボール転がし、探検、遊具などで遊ぶ。だんだんと打ち解け、同じものを使ったり、ボールを一緒に追いかけたり、くっつい たり離れたり。保護者同士ものんびりとした雰囲気の中、会話が弾んでいた。行政職員の方々がシャボン玉で一緒に遊んでくださり、１歳の子も喜んでいた。途中で雨が止み、公園の遊具で遊び始める。雨上がりの水たまりにザブザブ入っている姿もあった 。初めて番場公園に来たという３歳と１歳のきょうだいも来て、シャボン玉を少ししたり遊具で遊んでいってくれた。

03　令和4年9月14日(水）
参加者：乳幼児10名　小学生0名　大人15名　合計　25名

百日紅の花が咲いていたり、緑のどんぐりが落ちていたので、それらを子どもたちに見せると、ままごとの材料になったり、水に浮かべられたり遊び場が彩られていった。暑かったため、シートを広げた上にバケツに汲んだ水を流し、水たまりをつくると、子どもたちは喜んで裸足で入っていた。５歳の子も来ていたため、モンキーロープを木に設置して、チャレンジできるようにした。少し低めの高さでつくったため、３歳くらいの子たちも保護者と一緒に楽しんでいた。滞在時間長く遊んでいく親子が多かったので、保護者同士も会話が弾み、打ち解けた雰囲気となっていた。

04　令和4年10月12日(水)

参加者：乳幼児45名　小学生0名　大人40名　合計　85名

過ごしやすい気候。「市報を見た」「支援センターで紹介されて」「友達に誘われて」といったきっかけの参加者でにぎわった。たまたま公園に来た乳幼児親子は、遊具と行き来しながらプレイパークにも参加していた。プレイワーカーがダンボールをトンネルのようにすると、それをハイハイでくぐって遊ぶのが盛り上がっていた。子どもたちが遊ぶ傍ら、母たちは話に花が咲き、たくさんの交流が生まれていた。知り合い同士で来ている人たちもいたが、初対面の母同士も会話がはずんでいた。園路を通る高齢の方々も、プレイパークの様子を「こんなのあるのねぇ」と好意的に見てくださっていた。

05　令和4年11月　9日(水)

参加者：乳幼児51名　小学生0名　大人45名　合計　96名

これまでの最多人数の参加。リピーターの方も多く、プレイワーカーが 声をかけなくても、母たちが自分たちで遊んでいる姿が多く見られた。落ち葉がたくさん落ちていたので、大きい段ボールに集め、落ち葉風呂をつくった。中に入ったり、投げてかけたり、バドミントンのラケットですくって隣に移したりと、子どもたちは楽しそうに遊んでいた。園路からこちらを見ていた高齢の方に声をかけると、回覧板で知って様子を見に来てくださったとの ことで、とても好意的だった。他にも園路を歩く方に挨拶すると、最近は近所が高齢化して子どもがいないため、「子どもがいるとホッとする」と言ってくださった。

全体を振り返って

出だしは雨だったこともあり参加人数が少なかったが、天気がよい季節になると出足も増え、リピーターさんが自分たちの居場所のように新しい方を迎えてくださる雰囲気ができてきていた。子どもたちも、普段できないような水遊びや絵の具遊び、シャボン玉やダンボール遊び、どんぐりやどろんこなど使って夢中で楽しむ様子が見られた。

一緒に遊んでいただくまではできなかったが、ランニングやお散歩がてら、おしゃべりをしていってくれるご近所の方も多く、短期間ながら、プレイパークのことを地域の方や親御さんに知っていただくことができた。あいぱれっとは知っていても遠くてなかなか行けないという声も多く、来年度の継続を望む声も多数聞かれた。

「移動型プレイパーク」の開催
②平日15～17時　＠プラザ中央公園（西区）

01　令和4年　6月　8日(水)　曇り

乳幼児21名　小学生21名　大人24名　合計66名

着くとすぐに自治会長さんが来て準備から手伝ってくださる。公園入口3ケ所に、開催中だとわかる掲示物を設置する。14時半頃には、幼稚園帰りの親子が数組すぐに興味をもって近づいてきてくれた。その後も幼稚園帰りの親子が次々と来て、ミニピアノやカリンバ、しゃぼん玉、お絵描き、工作など、すぐに打ち解け遊ぶ姿もあった。16時近くになると学校に配布したチラシを見てきてくださった親御さんや小学生も。幼児がたくさんいて入りづらくないように声掛けをしたり、ロープ遊具を一緒につくったりすると、最後の方には「次回は月曜日がいい！」（帰りが早いから）などと話してくれた。

02　令和4年　7月　13日(水)

乳幼児25名　小学生27名　大人23名　合計75名

暑さもあり、水風船、水鉄砲で的あてのほか、水のかけあいなどで盛り上がる。段ボールでボールを転がして遊んでいた子が、途中「ダンボールに水を流してみたいけど他の子に言えない」と言う。プレイワーカーが「一緒に言ってみようか」と一緒に遊んでいた上級生たちに相談すると「いいね、おもしろそう！」とのってくれる。「段ボールは水に弱いって 初めて知った」と子どもたち。水道横に「水風船用ゴミ箱」を設置すると遊んでいた子どものみならず、気づい た大人や保護者の方も拾ってくれたり、捨てるように声をかけてくれていた。

03　令和4年　9月　14日(水)

乳幼児21名　小学生28名　中高生　大人19名　合計70名

3回目の開催のため、連続して遊びに来てくれる子が慣れた様子であそびを展開してくれる。「前回ここで将棋やってからやり方を覚えて家でもやるようになったんです」と幼稚園の子の母親が教えてくれる。すると「お、将棋できるのか」などと周りの大人が声をかけ会話が生まれていた。プレイワーカーがロープ遊具をつくっていると子どもも大人も声をかけてくれたので一緒に作る。ゴム跳びも人気で幼児から大人まで遊びこむ。「懐かしい」という大人や、「初めてやった」「どうやって飛ぶ の」と初めての子も挑戦しながら参加していた。

04　令和4年　10月　１２日(水)

乳幼児30名　小学生70名　大人25名　合計125名

準備段階から「楽しみにしていたんだよ。早く手伝いたい」と常連になった幼稚園児が手伝ってくれる。穴あきパネルをどのように自立させられるか、どこにどの組み合わせで並べるかなど試行錯誤。「いいことおもいついた」と何度も口にする。小学生も常連の子たちが「今日も来たよ！」と嬉しそうに参加してくれる。その子の友達が来た際に 「これが学校で言っていたおまつりみたいなやつね！」と学校でも話題になっている様子。放課後児童クラブも遊びにきていて、最初はこちらの様子をうかがっていたが、子どもが「やりたい」と言うと先生もOKしてくれ、綱引きや木工作、タイヤブランコなど思い思いに遊んでいた。

05　令和4年11月　9日(水)

乳幼児25名　小学生70名　大人30名　合計125名

プレイワーカーが落ち葉を集めていると、以前も来てくれた民生委員の方がお知り合いにも呼び掛け、ほうき持参で一緒に落ち葉掃きをしてくださる。子どもたちにも声をかけてくれたり、親御さんに「洋服汚れちゃうね」などと声をかけてくださり、交流が生まれていた。今日で今年はプレイパークが最後だと、子どもたちや場に来ている方々に話すと、「また来てほしい」「次はいつ来るの？」「来年は何曜日？」など継続を望む声が多く「アンケートにも書いておく！」と常連の小学生は張り切っていた。

全体を振り返って

開催前に自治会さんにご相談にいったところ、活動に大変期待を寄せてくださり、チラシの配布や駐車場の使用などご協力もいただいた。開催日当日も準備や片付けを手伝ってくれるだけでなく、一緒に遊んでくれたり来ている方に説明をしてくださったり、地域の方に見守られている遊び場の良さを私たちも感じさせていただいた。

17時までの開催のため、放課後の小学生が遊べる時間は1～2時間弱であり、もっと日常的に遊べるようにするためには頻度をあげるか休日に開催できることが望まれる。自治会の方から「お手伝いできる人が多いのは休日」とのご意見もいただいており、次年度以降は休日開催を行い、より地域の方々が広く主体的に関われるようにしていきたい。

「移動型プレイパーク」の開催
③土曜日11～15時　@岩槻城址公園（岩槻区）

01　令和4年　6月　11日(土)

乳幼児33名　小学生12名　中高生１名　大人42名　合計88名

大量の荷物を運ぶのに戸惑っていたところ、園内の整備をしていたシルバー人材センターの方がリヤカーで荷物運びを手伝ってくださる。準備中から通りすがりの親子が興味をもってくださりすぐにたくさんの方でにぎわった。特に、木工や廃材工作が人気で、親が手をとって教えてあげながら木を切ったり製作したりする姿が多く、持ち帰る子もいた。12時半頃から雨となり、場所を木の下に移動しブルーシートの屋根を張る。雨宿りをしていた親子に声をかけると、以前からプレイパークに興味があったとのこと。遊ぶうちに同じ1歳児の親子と仲良くなっていた。雨上がり、片付けもみんな手伝ってくれた。

02　令和4年　7月　9日(土)

乳幼児28名　小学生19名　中高生0名　大人43名　合計90名

朝の準備の時に、いつもギターを弾きにきているという方とお話しする。ギターを弾いているところに子どもたちが集まり、交流も生まれていた。芝生にブルーシートを広げ、散水ホースで水をまくと、小さい子から小学生まで遊ぶのにちょうどよい水たまりができる。プレイワーカーを通じて子ども同士の関わりも生まれ、見守る大人たちも次第に笑顔になっていった。遊びに来ている人の手も借りながらモンキーブリッジやブランコなどをつくると、 子どもたちは喜んで遊び、つくってくれた人も笑顔になっていた。

03　令和4年　9月　10日(土)

乳幼児45名　小学生17名　中高生0名　大人36名　合計98名

最寄りの小学校にチラシを配布していただいたことで、高学年の子も子どもだけで遊びに来てくれた。ノコギリ・トンカチ・ボンドなどをつかった木工作、ビーズやストロー、紙コップなどをつかった工作が人気。ロープブランコがつくってあるのを見て、自分でもロープを木にかけて遊び始めた兄弟も。長く遊んでいってくれる方が多く、様々な遊びを通して次第に子ども同士、大人同士、入り混じって遊ぶ様子がみられた。子どもが不登校気味であると悩みを話されるお母さんもいた。

04 令和4年　10月　8日(土)

乳幼児45名　小学生35名　中高生1名　大人54名　合計135名

前回までの遊びに加え、大きいダンボールを使ったおうちづくりなどができるようにした。ダンボールカッ ターで窓や扉をつくったり、ペットボトルキャップをドアノブにしたり、カーテンを屋根にしたり、お絵描きをしたりと楽しめていた。虫がいる季節なので虫網も用意。トンボやバッタなどを初めて会った子同士一緒にとって遊ぶ姿が見られた。終わり間際に来た太田小学校の　6 年生女子は「こんなに遊べるなんてすごい」ととても喜んでいて、次回 を楽しみにしてくれていた。全体的に、家族連れでの参加が多く、父親が一緒に遊ぶ姿も大変多かった。

05 令和4年　11月　12日(土)

乳幼児53名　小学生33名　中高生1名　大人67名　合計154名

リピーターが多く「以前とても楽しかったから」「声をかけてもらえて子どもがとても喜んでいたので」という方などが来てくれていた。いろいろな方が混ざって遊べるきっかけをつくってみようと、落ち葉を集めて遊ぶという動きをプレイワーカーが始めると、小学生や乳幼児親子の交流のきっかけになった。顔見知りになっている方も増えてきて、初めての方たちに遊び方を教えてくれたり、楽しそうに遊んでよい雰囲気をつくってくれていた。今日で終わりであることを伝えると残念がる親が多かった。太田小学校の子どもたちは、楽しかったと何 度もお礼とさようならを言いに来ていた。

全体を振り返って

土曜日の開催ということで、家族連れでの参加がとても多く、特にお父さんも一緒に遊んでいる姿が多く見られた。全く知らずにたまたま公園に遊びに来ていた方も、楽しそう、なんだろう？と近づいてきてくれて、市との協働事業であると伝えると安心して遊んでいってくれる方が多かった。

大人も子どもも居心地よく楽しくいられるように心がけたが、時間がたつうちに見ず知らずだった子どもや大人同士が関わって遊ぶ姿が見られるようになり、遊び場づくりの意義を感じた。小学生のみの参加が少なかったため、もっと広報を工夫したい。

２．講演会の開催

オンライン＆ 配信　講演会

『子どもがのびのび育つまちづくり』

～地域でできる遊び場づくりの取り組み事例～

令和4年9月7日、子どもの遊びの大切さや遊び場づくりの価値について共有するためのオンライン講演会を開催しました。また、その動画をYouTubeにて限定公開し、誰でも視聴可能としました。（参加・視聴者　67名）
その内容の要約をご紹介します。

子どもはなぜ遊ぶのでしょう

生まれてすぐ立てるようになる馬と違って、人はとても未熟で生まれます。
それは、後天的に必要に応じて脳を育てていくという生存戦略のため。「遊び」は育ちたいという本能的な発達欲求を満たす行為であり、人は生まれた瞬間から自分自身を育てようと、目新しいものに関心をもち、チャレンジしていくようになっているのです。

そもそも遊びってなんでしょう

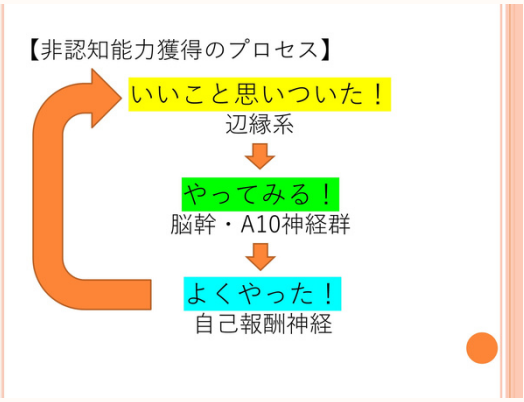
「遊び」とは内発的な「やりたい」という動機から始まるすべてのこと。子どもが自由に選び、自ら方向づけることができ、本質的に自らの動機に基づいてやることを指します。目的・ルール・方法・ゴールなどを大人が設定した上でやる「活動」とは異なります。遊びの方向性は人それぞれで、「何をする？どんな風にやる？」を自分で決めて行動することができ、遊ぶプロセスそのものが目的といえます。

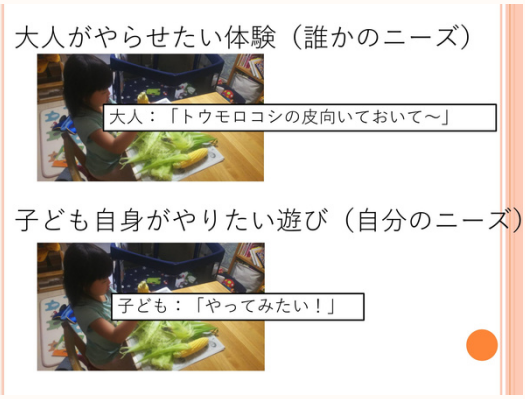
子どもは何かを身につけるために遊ぶわけではありません。大人がやらせたい体験（誰かのニーズ）ではなく子ども自身がやりたい遊び（自分のニーズ）に基づいており、遊ぶことを通じて、自分のモノサシを自身の中につくりあげていくのです。遊びは心の育ちと密接に関係しており、未熟でも迷惑をかけあいながら育つこと、子どもの感情やエネルギーを受け止める大人の存在が大切です。

講師：関戸博樹さん

（特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会代表理事）

全国の遊び場づくりに関わり、立ち上げ支援や人材育成などに携わっている。二男一女の父。著書に「子どもの放課後にかかわる人のＱ＆Ａ50」（学文社・共著）がある。





遊び育つという環境の変化

都市化・少子高齢化などの影響で、子ども（18歳未満）一人あたりに対する大人の数が著しく増えています（右の資料参照）。公園には禁止看板が目立ち、「ふざけて遊んではいけません」と書かれるまで、子どもが大人の目を離れてのびのび遊び育つという環境が失われてきています。

■「遊び育つ」という環境の変化

➢大人の都合が優先されやすい社会環境

※都市化・少子高齢化などの影響

子ども（18歳未満）1人あたりに対する大人の数の変化

1920年：1.33人/1人

1970年：2.46人

2010年：5.26人

将来予測として…

2060年の子ども（15歳未満）1人あたりに対する大人の数

8.76人！

参考：平成27年国勢調査　国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」（平成29年）

孤立した子育て

一方、子育て中の母親が、地域で声をかけてくれる人や悩みを相談できる人、子どもを預けられる人などがおらず、孤立感を増している傾向もみられます。また「我が子の将来に期待することは何かという問いに対して「他人に迷惑をかけない人」を選んだ率が他国に比べて非常に高いというデータもあります。

■孤立した子育て

約5人に1人の母親は地域で声をかけてくれる人がいない
→地域の中で子どもを通じた人付き合いの状況で下記の設問に「1人もいない」と答えた人のパーセンテージ

◆「子どものことを気にかけて、声をかけてくれる人」→19.9%
◆「子ども同士を遊ばせながら、立ち話できる人」→24.5%
◆「子育ての悩みを相談できる人」→21.7%
◆「子どもを預けられる人」→53.4%

「首都圏・地方市部ごとにみる乳幼児の子育てレポート」
2010年

■親のプレッシャー

わが子の将来に期待することは何かという設問に対して、「他人に迷惑をかけない人」を選んだ率は…

→：東京65.6%

ソウル21.1%、北京6.5%、上海5.9%、台北24.4%

幼児の生活アンケート東アジア5都市調査
ベネッセ教育研究開発センター
2010年発表

自己肯定感が低い子どもたち

また、「私は価値のある人間だと思う」という問いに対してそう思うと答えた高校生の割合が日本で著しく低いというデータも。国連子どもの権利委員会からは「極度に競争的な教育制度によるストレスが子どもの発達をはじめ、種々の問題を引き起こしている」という指摘もあり、現在の子どもたちの環境は、自分らしさに誇りをもてる環境とは言いづらいところがあるのではないでしょうか。

■自己肯定感が低い子どもたち

「私は価値のある人間だと思う」という設問に対して…

→日本9.6%（44.9）

米国53.2%（83.8）/中国27.9%（80.2）/韓国48.5%（83.7）

高校生の心と体の健康に関する意識調査
国立青少年振興機構
2019年3月発表

失われた寛容性を取り戻すために

人は遊ぶことで「自分」をかたちづくり、人生を手作りできるようになっていきます。そして、子どもは自分自身がどう育ちたいかを知っていて、子ども自身の人生を生きています。子ども時代。それは大人になるための準備期間ですが、この間にすべきことは大人に近づく方法を習ってできるようにすることではありません。大切なことは純粋に子どもとして生き、遊ぶことなのです。

遊び場づくりは、つながりづくりの装置、そして大人の壮大な遊びでもあります。大人同士が遊び、つながりながら豊かな関係を築くことが、子どもたちが安心してのびのび育つまちづくりにもつながります。最後に、子どもたちからおとなへのメッセージをお伝えして講演を終わりにします。

～子どもたちからおとなへのメッセージ～

まず、おとなが幸せにいてください。おとなが幸せじゃないのに子どもだけ幸せにはなれません。おとなが幸せでないと、子どもに虐待とか体罰とかが起きます。条例に「子どもは愛情と理解をもって育まれる」とありますが、まず、家庭や学校、地域の中でおとなが幸せでいてほしいのです。子どもはそういう中で、安心して生きることができます。

2001年3月子どもの権利条例子ども委員会のまとめ

3．学習会の開催

みんなで話そう！

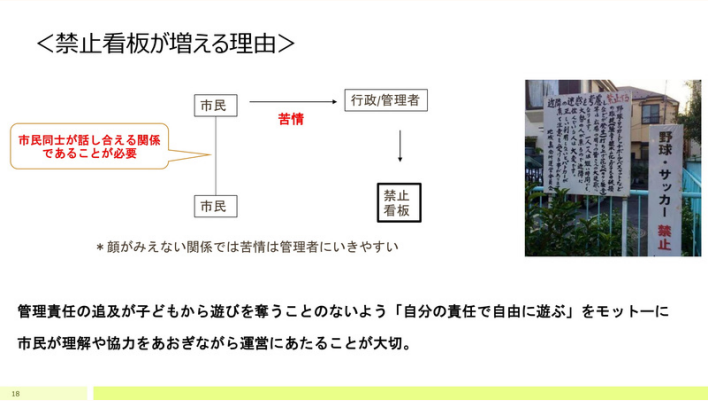
「こんな遊び場あったらいいな！」

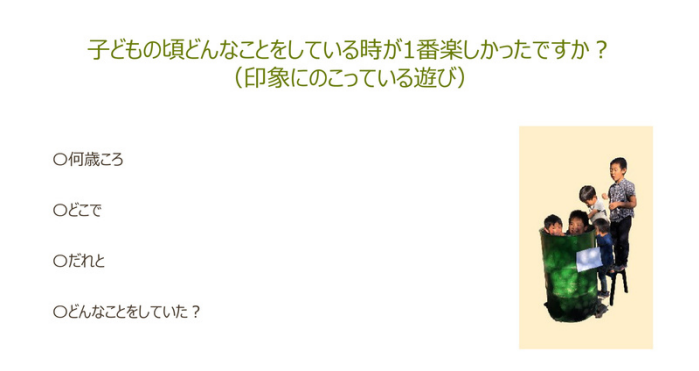
～「やってみたい」を実現する遊び場づくりのコツ～

移動型プレイパークに訪れた地域の方とお話する機会をもうけました。参加者の方は全部で5名と人数が少なかったものの、じっくりとお話をすることができました。今度は遊び場開催中にひらいてみたいと思っています！

10月26日(水)
大宮プラザ自治会館にて

12月10日(土)
岩槻駅東口コミュニティセンターにて





<ワーク>

①感想のシェア
②「こんな場がつくりたい」「こんなことがしてみたい」

<出たご意見>

○コロナ禍もあり、自治会では子ども向けのイベント・集まりができていなかった。保護者世代の地域活動への参加を促進する上でも、プレイパークの活動はぜひ続けていけるように協力したい。

○参加したり手伝いたくても、曜日や時間帯があわないと来られない人もいる（忙しい人が多い）。来年度は曜日を変えて開催してみてほしい。きっとこのような活動が好きな会員やお父さん等もいそう！

４．検討会の開催

①　遊んで学べる！

移動型プレイパークってどんな活動？

令和4年12月14日(水）9時半～12時　@あいぱれっと（冒険はらっぱ）

９時半～１０時半

移動式プレイキットで遊んでみよう！

2021年4月に発足した「移動式あそび場全国ネットワーク」主催の「日本縦断キャラバン！移動式あそび場リレー2022」に参加し、移動式プレイキットをつかった遊び場を開催しました。このリレーは、北海道から沖縄まで全国40ヶ所、手作りのプレイキット「あそぼっくす1号」をリレーしながら各地で遊び場を開催していくプロジェクトです。このネットワークの発起人の星野さん（カービー）をお呼びし、プレイキットの解説をしていただきながら、移動式プレイパークの模擬開催をしました。
（さいたま市子ども家庭総合センター冒険はらっぱ閉園日において開催。誰でも遊びに来てくださいと事前告知したところ、20名ほどにご参加いただきました）

担当課のみなさんや関係部署の方も参加してくださいました

手前のグリーンの箱がお茶箱を利用した「あそぼっくす1号」

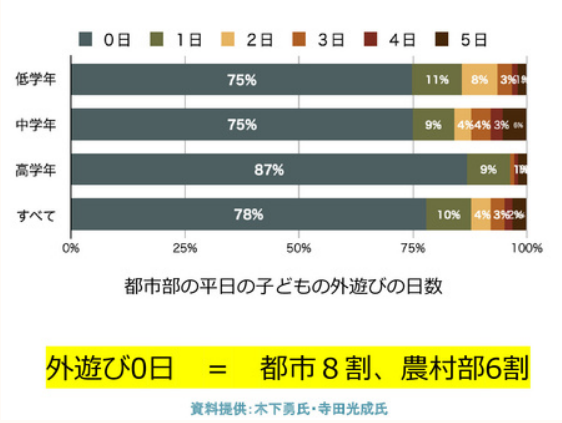
「あそぼっくす1号」に感動！

「あそぼっくす1号」はお茶箱を改造してつくった遊びの宝箱。外側は黒板塗料、内側はアルミ板がはってあり、ふたを閉じるとプラネタリウムのようになっていました。キャスターがついているので幼児さん２～3人が乗って遊ぶこともできる優れもの。右の写真のコリントの板には穴がたくさん空いていて、市販のフックやメッシュパネル、木の棒などを差して自由にコースを創ったり、輪ゴムや透明の管でアレンジを加えてビー玉を転がすことができ、大人もはまる楽しさでした。

星野さんいわく、移動式で遊び場を開催するときは、コンパクトだけれど様々なアレンジをして遊べる素材があることが大事で、遊びの広がりをある程度想定しながら、どこにどんなものを配置しておくかを考えているとのことでした。とてもカラフルで、見た目にも「面白そう！」と思わせる工夫が様々で、遊びにきた幼児から高校生まで楽しめる内容のものが詰まっており、私たちもとても勉強になりました。

10時40分～11時10分

「どこでも遊び場！」講演会　（移動式あそび場全国ネットワーク代表　星野　諭さん）



「遊びは世界を自由と平和にする」

一級建築士、こども防災活動家でもあるプレイワーカーの星野さんのモットーは「遊びは世界を自由と平和にする」。冒頭で「今の社会は遊びの価値をキープできていますか？」との問いかけがありました。なんでも禁止するのではなく、どうやったらそれができるのか工夫しようとする視点が大切とのことで、様々な事例を紹介してくださいました。

日本の子どもの環境について

星野さんは左の「外遊びが1週間のうちに0日」という割合が、都市部で8割、農村部でも6割という調査データを示し、現在のこどもの環境の貧困が、日本全体の課題であると述べられました。また、ある調査によると日本の子どもの幸福度は38か国中37位であり、遊びは「生きるって面白い！幸せ！」と思うことにつながる、必要不可欠なものだとお話くださいました。

子どもの居場所×見守るコミュニティ＝子縁

また、様々な場所で移動式あそび場が「子縁」をつくることにつながった事例をお話いただき、令和2年日本学術会議の提言の中にも、子どものところに出向くアウトリーチ活動の必要性がうたわれていることを紹介してくださいました。

11時10分～11時40分

「プレーカー事業」世田谷での取り組み事例（プレイワーカー　早川　七海さん）

世田谷区でのプレーカー事業

早川さんからは、以前勤務していた「NPO法人プレーパークせたがや」のプレーカー事業についての事例をお話いただきました。世田谷区では2015年度から区の補助事業として、プレーパークのない地域3ケ所(現在は2ヶ所)に遊びの出前をする活動として展開されているとのこと。塗装ラッピングした軽ワゴンに遊び道具を詰め込み、各地域の方と「なにして遊ぶ？」を一緒に考えながら展開することを大事にしていたとのお話でした。

子ども・遊びの可能性は無限大！

具体的に、どんな遊びが展開されたかも写真を通して紹介いただき、芝の斜面にシートをひいて水を流したウォータースライダーの様子や、たき火を囲んでマシュマロを焼いたりご飯をつくったり、ロープ遊具を子どもたちと一緒につくったりする楽しそうな場面を見せていただきました。子どものアイデア、大人たちの協力で、遊び場づくりは無限の可能性をひめていることを教えていただきました。

11時40分～12時

質疑応答

参加者の方からは、企業内でプレイパークをする時に必要なこと、地域でプレイパークをする際に最も大事にしていることは何か、ハードルをどのように乗り越えたらよいかなどの質問がでており、より具体的にイメージを広げることができました。

「移動型プレイパークってどんな活動？」アンケート結果
（参加者１０名：うち行政関係者８名・市議会議員１名・運営者１名）

○今日の遊び場・学習会の感想をお聞かせください。

・最初に遊びのキットを使いながら遊びの体験をできて非常に楽しかった。
　講演では、事例をまじえて貴重なお話をうかがうことができて良かった。
・心をくすぐる遊び場、すぐに広がる素材が素晴らしい。
　子どもにとって必要不可欠な場所と改めて感じた。
・現在、ゲームとかスマホで遊ぶことが多いけど、今回は創造的な遊びがたくさんあってよかった。
・遊びから得られるものがたくさんあるといろいろ気づかせていただいた。
「とりあえずやってみる」といろいろ広がっていくんだなと勉強になった。
・様々な活動や実施を知って、今後のプレイパークに興味が出た。
・地域とのつながりを大切にしているということが印象的だった。
・活動の記録も楽しく見させていただきました。
　半日常の入り口となるところはとても聞いていて参考になりました。

○「移動型プレイパーク」「移動式あそび場」のような活動が地域に必要だと思いますか？またその理由をお聞かせください。

＜必要だと思う　回答１０（全員）＞　その理由
・遊びの広がりのきっかけになるし、コミュニティづくりのきっかけにもなるため。
　自分も子どもとこういう場所で遊びたいため。
・地域に子どもたちが自由に遊べる場が少なくなっている中、このような活動は必要だと思いました。
・単なる遊び場の提供だけでなく、地域のつながりを強める意味でも重要であることを感じた。
・現在、子育てを一人でやっていて、悩みを抱える親が多いと感じる。
　身近な遊び場でつながりをつくる必要があると感じる。
・シンプルにプレイパークを感じられる場所が増えたりその機会が多ければいいと思えるため。
・地域のつながりへと発展していける活動だから。偶然の人たちとの出会いから世界が広がるから。

○このような活動を行うにあたってクリアされるべきこと、心配なことがあればご記入ください。

・市のバックアップ（ボランティアではできない）。開催場所の選定（ルールが厳しい場所が多い）。
・プレイワーカーの存在が必要不可欠であり、そのような仕組みが必要。
・場所の確保。スタッフやキーとなる地域の方とのつながりをどうつくるかは時間をかけて考えていく必要があるなと思いました。
・地域住民からの理解。場所の確保。
・地域の協力、プレイワーカーによる見守り（安全面等）。
・遊び場の重要性について理解を広める必要があると感じた。
・みんなに知ってもらうにはどうしたらよいか。
・子どもの安全はもちろんですが、あまりにも安全を気にするあまり、遊びが小さくなってしまうこと（気にする人や意見が出てくると）。

○その他、遊び場・遊び場づくりに関するご意見などご自由にお書きください

・企業主導型プレイパークづくりのヒントをこの先もいただければ幸いです。立ち上げ頑張ります！
・とても勉強になりました。ありがとうございました。職員としても、子どもの親としても、冒険はらっぱや移動式プレイパークが広がると良いなと思いました。
・早川さんの、やりたい人とどうやっていけるかなという視点がとても共感できました。それは地域の財産ですね。私も道あそびしてみます。

②先進事例から学ぶ　プレイパーク事業検討会

令和5年1月23日(月）10～12時　＠あいぱれっとオープンスタジオ

日本冒険遊び場づくり協会代表の関戸さんより、他市の先進事例についてお話しいただきました。

冒険遊び場づくり事業

- 2012年：朝霞の森のオープンを機に市の委託事業化（2021年次は年63日間の開催で10,562人の参加実績）
- 2020年：第2期朝霞市子ども・子育て支援事業計画に子どもの健全な成長を支える居場所づくりの一つとして「冒険遊び場づくり（プレーパーク）事業」」の記載（根拠法は次世代育成支援対策推進法）

埼玉県朝霞市の移動プレーパーク

NPO法人あさかプレーパークの会では、2020年：第2期朝霞市子ども・子育て支援事業計画に 子どもの健全な成長を支える居場所づくりの一つとし て「冒険遊び場づくり（プレーパーク）事業」が記載され、事業化されたとのこと（根拠法は次世代育成支援対策推進法）。年20日の開催で、1617名の参加があった。

行政課題とのリンク

第5次朝霞市総合計画後期基本計画（令和3年3月発行）

第5章：都市基盤・産業振興
03：緑・景観・環境共生
2：うるおいのある生活環境づくり

現状と課題：公園、緑地、道路など公共空間へのニーズの多様化に対し柔軟な対応が求められています。特に子どもの外遊び空間の充実について取り組む必要があります。

③みどり空間の魅力向上：子どもの外遊び場の充実を目指し、移動プレーパーク等のモデル事業の実施に取り組みます。公園の魅力を伝え、機能が効果的に発揮できるように景観と調和した親しみのもてる分かりやすい公園サインの検討を進めます。

令和3年3月発行の第5次朝霞市総合計画後期基本計画＞第5章：都市基盤・産業振興＞03：緑・景観・環境共生＞2：うるおいのある生活環境づくり＞③みどり空間の魅力向上の中においても、「子どもの外遊び場の充実を目指し、移動 プレーパーク等のモデル事業の実施に取り組みます」とうたわれており、行政課題として位置づけられることで事業化が進んだことをご説明いただきました。

神奈川県横浜市のプレーパーク事業

実施主体：
横浜にプレイパークを創ろうネットワーク（YPC）

- 2002年発足
- 基本理念「子どもたちが野外でのびのびと遊べる環境をつくっていくこと」
- YPCは中間支援組織としてプレイパークを開催する各団体（市内17区で25カ所）と連携、プレイリーダーの雇用や養成を担っている

横浜市には、2002年に発足した「横浜にプレーパークを創ろうネットワーク（YPC）という団体がありプレーパークを開催する各団体（市内17区25ヶ所）と連携し、プレーリーダーの雇用や養成をしているとのこと。2006年には環境創造局公園緑地維持課において「プレーパーク運営支援要綱」が策定され、新規立ち上げや活動支援の方策がつくられると、2007年にはこども青年局放課後児童育成課で「プレーパーク支援事業補助金交付要綱」が策定。プレーリーダーの養成や配置、立ち上げ時のコーディネイター派遣についての整備が進んでいるそうです。

行政との関わり

事業名	所管部署	根拠条文	支援内容
プレイパーク支援	環境創造局 公園緑地維持課	プレイパーク 運営支援要綱	施設の整備
			活動団体支援
			新規立ち上げ支援
	こども青少年局 放課後児童育成課	プレイパーク支援事業 補助金交付要綱	コーディネーター派遣
			プレイリーダーの 養成・配置

趣旨や責任が明確であること(保険加入)、現状復旧、誰でも無料で自由に参加可能なことなどの条件を満たせば、身近な公園で活動してみたい時の相談や地域との連絡調整 、 物品（ロープ、ドラム缶、シート、救急セット、工具 ）の貸し出し、必要なもの（倉庫、掲示板、洗い場など）の設置を支援してくれる体制も整っているとのことでした。

岡山県岡山市のプレーパーク普及事業

外遊び体験推進事業について（2017～）

- 外遊びを通じた児童健全育成と地域ぐるみでの子育ての気運を高めるため
- プレーパーク普及事業「プレーリーダー養成講座」を受講し、修了証を持つ方を3名以上含む団体が、外遊びに関する事業を実施する場合に補助金を交付
- 年度内に1日開催する場合50,000円、年度内に2日以上開催する場合1日目について50,000円とし、2日目以降、1日開催するごとに10,000円追加（上限は150,000円）

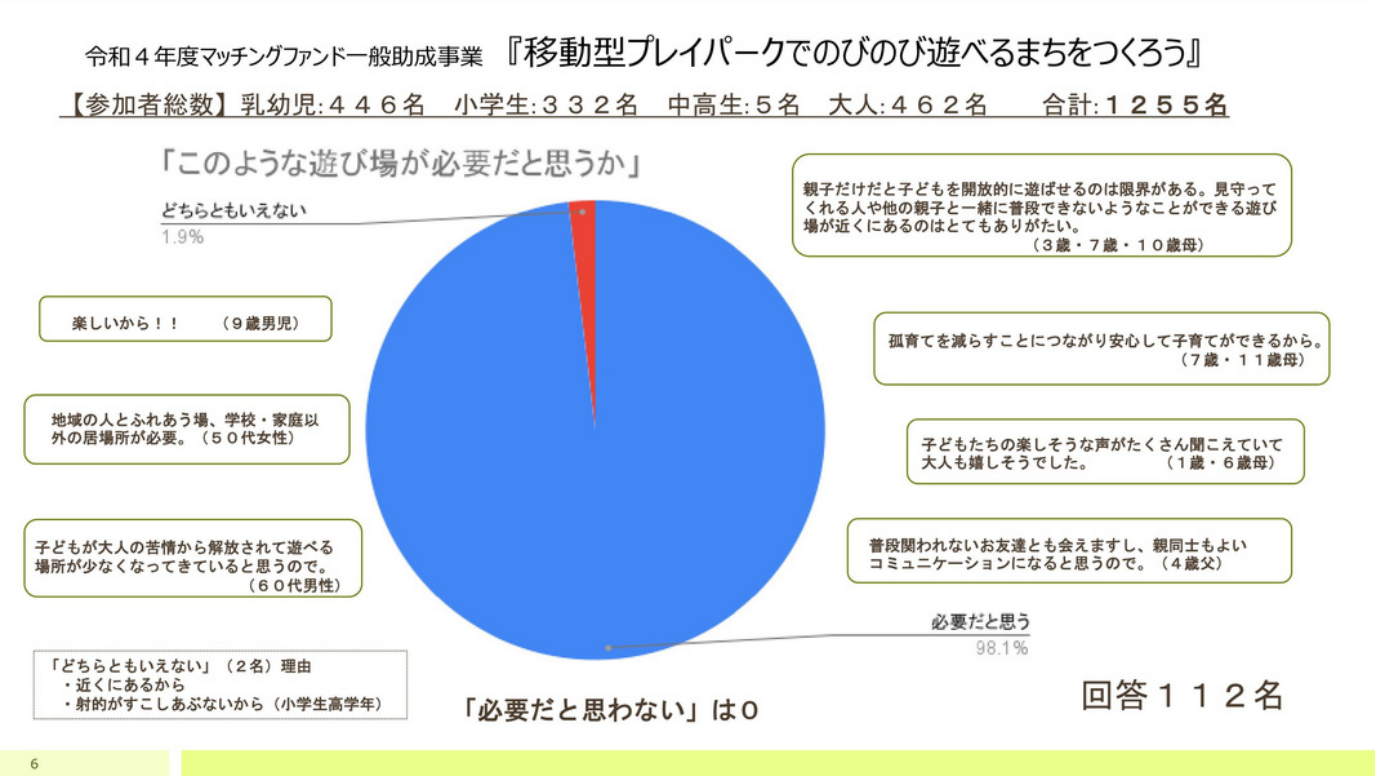
岡山市では、2015年から「外遊び」を通じた児童健全育成 、地域ぐるみでの子育て支援環境の充実を目指し「 プレーパーク普及事業」が展開されています。「プレーリーダー養成講座」として、基礎講座→「事前養成講座プレーパークの開催→事後養成講座」×3か所→全体研修 →修了証の発行が行われているそうです。

2017年からは、プレーリーダー養成講座の修了証を持つ方を3名以上含む団体が、外遊びに関する事業を実施する場合に補助金を交付するなどが整備され、プレーパークの普及が進んでいるとのことでした。

５．まとめと考察

(1)　アンケート結果

【移動型プレイパーク参加者へのアンケート】



遊びに来た方にアンケートをお願いしたところ、このような遊び場が地域に必要だ、と思う方が112名中110名と大多数であり、上記のような理由があげられました。普段の公園や親子だけではできない遊びの体験ができること、子どもだけでなく大人にとっても有意義な場所になりえることがうかがえました。

【周辺住民へのアンケート】

また自治会にご協力をいただき、周辺住民の方へもご意見をうかがったところ、17名中15名の方が「このような遊び場が必要だと思う」とお答えになり、その理由として「無料で遊べるところが少ない」「学区を越えた児童と遊ぶ場所が必要だと思う」「自由に遊べる場が少ないから。昔は、行き過ぎれば注意してくれる目があった」などのご意見をいただきました。

「ご自分の地域でプレイパークが開催される場合、プレイワーカーの配置が必要だと思いますか？」という質問には、必要だと答えた方が17名中15名で、その理由として「危険から学ぶことも多いが、限度があるためフォローは必要だと思う。家庭ごとに方針はあるため、フラットな立場でフォローできる第三者が必要だと思う」との意見がある一方、「プレイワーカーがいないとプレイパークが設置出来ないという制約条件になると本末転倒な気がする」というご意見もありました。

「プレイパークがご自分の地域で開催される場合、心配だと思うことはありますか？」という質問に対しては、「特になし」が半数であったが、「火の後始末、掘った穴の跡」「危機管理」「混雑」「子どもへの保険適用」などのご意見がありました。

プレイパークがご自分の地域で開催されることについては概ね賛成のご意見が多いが、けがやトラブルがあった際の対応や、公園利用者や周囲への影響などについて懸念する声もありました。継続して開催するにあたっては、そのようなご意見を受け止め、対応したり一緒に考えていただけるようにしていきたいと思います。

⑵　事業全体における成果と課題

【成果】

「移動型プレイパーク」を市内３ケ所で開催できたことによって、プレイパークを知らなかった、遊びにきたことがなかった、という市民の方や子どもたちにプレイパークを知ってもらうことができました。

各地域、続けて参加してくれている方が、初めて来る方に遊び場の説明をしてくれたり、交流して遊ぶ姿も見られるようになり、プレイパーク、プレイワーカーの活動が地域のコミュニティづくりの役割も果たすことを実感する機会ともなりました。

担当課を通して各地域の公園周辺自治会へご挨拶ができたのも、マッチングファンド事業だからこそであったと思います。自治会ではコロナ禍の影響もあって、子ども向けの活動や担い手が減っているとのことで、連携についても前向きに考えていただくことができ、私たちのようなNPOと自治会との連携について、今後の可能性を感じることもできました。

アンケートを通して現在の子どもの環境やプレイパークに対する感想やご要望などもうかがうことができ、想像した以上に、このような遊び場が幅広い年代の方から必要と思っていただいていることも分かりました。また、住民の方、公園管理者の方などのご心配もうかがうことができ、今後の活動に向けての大きな示唆となりました。

今回、公園利用については「都市局（都市公園課）」、プレイパークの推進に関することについては「子ども未来局（さいたま市子ども家庭総合センター総務課）」と相談しながら事業を実施させていただきました。これまで、市内にプレイパークを広げるということを担当する課ははっきり決まっておらず、このような連携によって事業を実施し、円滑に進めることができたのも大きな成果であり、引き続き連携していけたら幸いです。

【課題と展望】

「プレイパークが必要」という方が大多数であり、お手伝いをしてくださる方は増えてきましたが、継続していくための方法については、地域の特性や関わってくださる方によってそれぞれ考えていく必要があります。プレイワーカーのような働きをできる人が地域で育つことを目標に、その支援の方法を行政と協働で考え、つくりあげていきたいと考えています。

プレイワーカーは、子どもたちが自由に遊べる環境をつくることが仕事です。それには、道具や素材の準備だけではなく、子どもの冒険心やひとりひとりの気持ちによりそったサポートができることが必要です。また、子どもの挑戦を保障する一方、大きな事故やけがを防ぐための危険管理も行っています。そして何より、地域の方同士をつなぎ、子どもたちを一緒に見守りあえるコミュニティをつくることを大切にしています。そのような役割を果たす人が継続的に関われることが、安定し充実した運営につながります。

本事業では、プレイパークの活動がまったく行われていない地域をあえて選んで、開催を行いました。プレイパークで遊ばせてもらう側から、その地域に住んでいる方自身が行う居場所づくりへとシフトさせていくこと。また、上記のプレイワーカーのような存在が継続して関われるようにすること。その２点については、引き続き遊び場を開催しながら、地域の方や行政の方も一緒に模索していただけるよう、２年目以降も事業を継続していければと考えています。

そして、本事業がモデルとなって、さらに他の地域でもプレイパークの活動が展開されていくよう、行政の方をはじめ、地域の様々な団体の方々と連携していければ幸いです。

おわりに

本報告書の仕上げを行っている令和５年3月13日、厚生労働省よりマスクの着用について「個人の主体的な選択を尊重し、着用は個人の判断が基本となります」との声明がだされました。

私たちが予想もしない形で、これまで当たり前だった日常生活が送れなくなり、人との会話、たわいのないふれあいもできなくなってしまっていたここ3年ほど。

振り返ると、1回目の緊急事態宣言解除後に再開した遊び場では、子どもたちがとてもおとなしかったことを覚えています。しかし徐々に破壊的な行動やけんかなどのトラブルが増え、それまで子どもたちにかかっていたストレスが現れているのだろうと感じました。同じように、子どもをもつ親御さんたちの孤立感やストレスも感じ、今こそゆったりと関わりあえる遊び場づくりが必要ではないか、と思いいたったことも、今回移動型プレイパークをやろうと決めた大きな要因でした。

子どもたちは遊び場の中で、本当の気持ちを見せてくれます。大人もまた、本当の気持ちを聞いてもらえる、身近な存在が必要なのではないでしょうか。地域に遊び場をつくっていくということは、そのようなつながりを取り戻していくという試みであるとも思っています。そして、そのような豊かなつながりを感じられる地域社会の中でこそ、子どもたちは豊かに、安心して育っていくのではないかと考えています。

今後もさらに多くのみなさまとつながりながら、楽しみも悲しみも分かち合えるような関係を地域につくっていけたら幸いです。本年度ご協力いただきましたみなさま、ありがとうございました。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

令和５年３月吉日

特定非営利活動法人たねの会
代表/プレイワーカー　佐藤美和

たねの会

＜連絡先＞

特定非営利活動法人たねの会

✉　info@tanenokai.org

☎　090-7179-5436